岩手看護短期大学紀要　第８号　37－38頁　2008

その他

岩手の二人の医聖
―― Iwateability ――

小野　繁（岩手医科大学 名誉学長）

明治の初期、駐日フランス大使を勤めたポール・クローデルは云った。「日本は貧しい。しかし、高貴だ」彼は、明治維新という世界でも稀な近代化への大改革など近代国家への仲間入りを成し遂げた多くの明治の人々に接してきた人である。そして更に、「地上に決して滅びて欲しくない民族を一つ挙げるとすればそれは日本人だ」と公言して憚らなかったと云う。

明治の日本人に対する一外国人の率直な真情吐露に深い感銘を受けたのである。これが正にJapanabilityの本質を示したものであろう。

一方、岩手県人の特徴を、終戦間近から花巻に住んだ有名な彫刻家である高村光太郎は、「日本の背骨、岩手の地に未見の運命を担う。岩手の人沈深牛の如し…地を往きて走らず、企てて草卒ならず、ついにその成すべきを成す」。と堅実な県民性を高く評価している。この様なすぐれた県民の活力、底力をIwateabilityと呼称したい。そこで広く医学の発展に寄与された岩手の先人の努力と業績を振り返り、閉塞的な今の時代に学ぶ諸君に自信と誇りをもってもらいたいとこの一文を草した。

医学に貢献したIwateabilityをもつ優れた人物として、まず奥州水沢出身の高野長英（1804～1850）を取上げたい。

彼は鎖国時代における西洋医学としての蘭学（オランダ医学）の日本における先駆者の一人である。17才にして江戸に上り、あらゆる辛酸をなめながらもシーボルトの鳴滝塾に入り、蘭学に没頭し27才にして、その成果として「西説医原枢要」全６巻の生理学書を上梓した。辞書もないその時代にどんなに苦労し翻訳したか。岩手の人ならではの努力には敬服の外はない。

憂国の士、渡辺崋山と盟友となり、鎖国政策に抗し世界に雄飛するための開国を説いた。それが幕府の逆鱗にふれ、追われる身となり投・脱獄を繰返し、遠くは仙台伊達藩に関りの深い（当時、水沢は仙台領）四国宇和島に至る逃避行。遂に捕吏に囲まれ自殺した。正に波乱万丈の一生であったが、勇気をもって高潔なる論理を説く姿勢は終生失われなかった。

鎖国時代の西洋医学、特に蘭学は長崎の出島を接点として発展したが、日本医学の近代化に果たした長英らの役割は計り知れないものがあった。終焉の地から分骨し故郷に安らぎを得たのは、つい昨年であった。機会を持ち長英の記念館を訪ね、先人の想像を絶するオランダ医学研究の労苦を偲び、岩手の人、長英の存在に誇りをもってもらいたいものである。

次いでIwateabilityの象徴としての人物は、岩手に初めて西洋医学もたらした学祖、三田俊次郎をあげたい。

学祖の不滅の業績は医学・女子高等教育をはじめ育英、専門病院開設による社会福祉等、彼から感銘を受けた卒業生医師の生涯にわたる土性骨たらしめた、施療院的慈善事業など枚挙に暇がない。それらは連綿として世紀を超え岩手の地に息づいている。

盛岡先人記念館には、岩手医科大学から学祖と初代学長三田定則先生の業績が顕彰されている。同窓生として大いなる誇りを感じている。学祖の医学教育に対する信念は岩手医学専門学校開設認可時（昭和３年２月15日）に岩手毎日新聞紙上に出た談話によって全てを理解することが出来る。「医療は済生の根本、良医（医療人）を養成して新附の蒼生を慈恵せよ」。

学祖の西洋医学の岩手への導入の原点となったのは、生涯に亘って最もエポッキングな行動

と評価される岩手産婆看護婦学校の（1897・明30）設立がある。この発想はどの様に培われたのだろうか。時代的背景を顧みて私見を述べたい。

眼科医として開業の傍ら学祖は、1891年（明24）東大眼科に内地留学し、２年間研修に励んだ。指導教授は欧米留学を終えて帰朝したばかりの新進気鋭の河本重次郎であった。学祖は教授帰朝後の第一期の門下生となった。教授の見聞した西洋医学の現状を知り、また教授の推薦する外国人の医学書特にF. Nightingaleの「看護覚え書」や「病院覚え書」等を通読する機会が多くあったであろう。

1854年勃発したクリミヤ戦争にF. Nightingaleはシスター24名、看護婦14名の計38名と共に志願、従軍。その活躍は国家的、国民的、熱狂的に高く評価され「クリミヤの天使」と称される様になった。注目すべきは、野戦病院におけるよく訓練された看護婦「Well trained nurse」の功績である。手厚い適切な看護により戦傷者の救命率は高揚した。特に革命的ともいえる「リスターの石灰酸消毒法」の実施により、感染症の罹患率は低下、予防によるところが大であった。F. Nightingaleの行為は、正規の学校で教育を受けてよく訓練された看護婦の医療における必要かつ、その重要性を痛感させるのに充分であった。

F. Nightingaleの看護教育に対する数々の箴言、健康と環境問題、地域巡回看護、収容より在宅など150年たった今も、現代の医療制度に比べ何ら違和感のない優れた時代感覚である。また病院の具えるべき第１の条件は病人に対して如何なる害も与えず、患者のために病院があるとした不易の医療の基本的本質は、学祖をはじめ明治の医療人は深い感銘を受けた事であろう。

またF. Nightingaleは、看護は病人と健康人は同一であり、自然が病気や障害を予防したり癒したりするのに最も望ましい条件に生命をおく事であると述べている。ヒポクラテスが「医は自然の僕」であり自然が癒し、医はこれを助くるとの哲学に類似した思想であることが理解出来る。

学祖が東大で研究中、1887年（明20）慈恵についで全国２番目に看護婦養成所が設立された。学祖はつぶさに養成所の教育制度の全てを詳細に知る機会に恵まれた。それが岩手に看護学校を作る大きな刺戟となったであろう。正に文明開化の真只中にあって、時代思想、教育思想などその後の学祖の人生観に多大な影響を与えたことは論を待たない。蘭学が主であった日本の医療にイギリス、ドイツなど先進国の医療技術に加え、人々の健康保持のための国家的衛生、保健制度の充実、教育など学祖を含め明治の医療人にとって彼我の医療に対する考えの違いは正に晴天の霹靂の思いであったろう。

学祖が優れた西洋医学の趨勢を知りそれを岩手に導入し、人々に恩恵を与えようとする強い意欲を感じたのはIwateabilityとしての卓越した先見性と判断によるものであり敬服の外はない。1891年（明24）29才の時であった明治の初期、岩手は無医村が多く、医療設備の貧弱な点では全国一と言われていた。当時、結核と脚気が国民病として全国に蔓延し、岩手もその例外ではなく、稗や栗を常食とし、蛋白摂取量が極端に少ない偏った栄養状態と生活衛生状態も劣悪であった。郷土を愛する学祖は、岩手の各地に有能な産婆と看護婦を送り込み多くの命を救うことは、緊急の課題であり自分の信念でもあり、岩手にも養成所を設立しWell trained nurseを養成する以外この窮状を救う方法はないと考えた。

学校設立によって看護教育は勿論のこと、一般市民の衛生思想の向上、健康保持、栄養指導などによる劣悪な生活環境の改善がなされたのは、歴史的に高く評価されよう。

二人の優れた岩手の医療の先人Iwateabilityの共通した信念は、不撓不屈の精神を持ち世界を見据えて日本や岩手を考えるThink globally act locallyつまり極めて先見性のすぐれた人物であった。

現代も岩手の医療の評価が高いのは、これら先人の遺訓に負う所が大であることを銘記すべきであろう。

（2008年12月）